

# 異文化の理解

鈴木雅光

## 1 はじめに

異文化を理解することは容易ではない。それは考えている以上に難しいものである。できそうでなかなかできないというのが私の個人的な感想である。しかし異文化を理解し、それに少しでも近づくのは、国境なき社会に生きている今日においては、我々の使命と言えるかもしれない。本稿では異文化を理解するためには何をすべきかを考えてみたい。

異文化を理解してどうなるのだという議論があるかもしれない。しかし今日のように世界が狭くなってくると、そうも言っていられないのである。自己の文化しか知らない者は、自己の文化を半分も知らないだろう。それは性善の存在を知って、性善の価値が分かるのと同じである。性善しか知らない者は、本当の性善を知らない者なのである。

## 2 異文化を理解するとは

異文化を理解するということはどのようなことか。それは異質なものを認めるということである。人種の数だけ文化がある。文化を形成しているものは、その国の伝統的な風俗や習慣であったり、教育であったり、あるいは宗教であったりする。違ったものを認めあい、違いに敬意を払いつつ、その違いを共感する。このような姿勢が異文化を理解する上で重要である。

異文化理解においてはまた、異質な他者との共存が求められる。日本人は異質な他者と共存するという経験をめったにしない。海外に出かけたときそのような経験をするのだが、海外の旅は普通極めて短期間であるから、じっくり他者とコミュニケーションを取ることがない。異文化理解は異質

な他者とのコミュニケーションが必要であり、コミュニケーションから始まるのが基本である。

## 2.1 異文化を理解するための英語

異文化を理解するには、相手の言語を学ぶことがまず大切であろう。しかしすべての外国語を学ぶことは不可能であるから、国際語として通用している英語あたりが最も無難と言えるかもしれない。日本人は特に英語の学習に膨大なエネルギーを費やすほど外国語の勉強に熱心である。従って、日本人は異文化の理解に一番近道にいるように思えるが、実体はどうであろうか。

答は否である。なぜか。勉強の中味にあるのではないか。日本人の英語学習は異文化を理解するというよりも、中高生にはテストのための勉強であったり、大学生には資格検定のための勉強であったりと、点数との結び付きが色濃い。従って、何年英語を学んだとしても、異文化を理解するような目的で学ばれることが少ないので、異文化の理解からは遠い存在にいるのである。せいぜい、海外に数カ月から1年くらい留学した者に、異文化理解の芽が育って来るくらいである。

異文化の理解は異文化に触れることから始めなければならない。海外に行けないなら、異文化理解の目的でもって編集されたテキストを利用すればよい。近年、大学のテキストは、異文化を理解するように編集されているものが多くなってきている。語学学習のメリットを異文化理解にシフトして、テキストが作られ出してきたのは喜ばしいことであるが、問題は異文化を教えられる教員が少ないということである。異文化理解は触発される出来事がなければ起きない。ただテキストを読んだだけでは、触発される可能性は少ないと思われる。

さらに異文化を理解するには学ぶことが必要である。表面的な違いだけに触れるのではなく、本質を理解するには学習が必要なのである。異文化の風俗や習慣、価値観や行動様式を理解することは、異文化受容の第一歩である。

異文化の理解は相手の文化の理解を無視しては成り立たないのである。これらは学ばなければ本質的な理解はできない。

さて、英語ができれば必ずしも国際人になれるわけではないが、交流の手段としては英語が便利であり、手っ取り早いコミュニケーションの手段となる。我々日本人にとって、日本語は、残念ながら、マイナーな言語であるので、通じる国はほんのわずかしかない。従って、海外に出かけて意思の疎通を図ろうと思っているならば英語を学習せざるを得ない。これには不満もあるだろうが、現実はこのような状況になっていることは認識しないといけない。

英語はなぜ世界中に広まり、グローバルな言語になったのかについてここで少し考えてみよう。

英語を母国語(=第一言語)としている国は、アメリカ、イギリス、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどで、その人口は約3億8千万人である。これだけでは世界の人口に占める割合はそれほど大きくない。人口数だけではグローバル語にはならないのである。

David Crystalという英国の言語学者によると、ある言語がグローバル語になるには「特別な役割」が与えられることが必要であるということである。その特別な役割とは、英語を母国語としている国以外で、公用語(official language)に採用されることであるとCrystalは述べている。英語を公用語つまり第二言語としている国は、ガーナ、ナイジェリア、インド、シンガポールなどで、その人口は3億5千万人である。これは英語を母国語としている国の人口とほぼ同じである。

これに日本やロシアのように外国語として英語を学んでいる国の数は100カ国以上にのぼっており、その人口は約12億人から15億人とされている。

英語を母国語としている国、第二言語としている国、そして外国語としている国の人々の合計は19億3千万人から22億3千万人となる。世界の人口比から見ると、何らかの形で英語とかかわっている人口は、世界の人口の約3分の1に達するのである。

このような現象は他の言語には見られない特徴である。つまり、英語は他の言語を圧倒して、世界各地で通用する言語となっている。だから英語は「国際語」(international language)、「グローバル語」(global language)、あるいは「世界語」(world language)とされている。世界には言語が5,000位あると言われている中で、現在「国際語」とか「グローバル語」と呼ばれている言語は英語以外に存在しない。

かつて中世の時代までは、英語は野蛮な言語として扱われていた。それがなぜ国際語の地位まで昇り詰めたかということ、ごく簡潔に言うならば、19世紀に世界に先駆けていち早く産業革命をなしたイギリスの植民地政策によって、英語が世界中に送り出された。そして20世紀にはアメリカが経済的に発展し、電信、電話、ラジオなどの新しい通信技術によって、英語は拡大し続け、さらに大衆娯楽である映画、音楽、レコード産業などの技術革新の分野を一手に握ったアメリカによって、英語は世界中に送り出されて行ったのである。

既に学問とかコンピュータの分野では英語ができなければ、絶対的に不利であり、世界の進歩に後れをとるだけであると言われている。

さて、英語ができることと異文化の理解はどう関わってくるかということである。もちろん、英語ができるようになったからと言って異文化が理解できるわけでもない。語学以前の問題として異文化を受容できるcapacity(包容力、度量)がなければならない。が、英語は異文化理解の戸を開ける鍵である。英語を利用することで、多くの人の考え方に接し、知ることが可能であるし、多くの文化に接触することができる。言葉と文化は密接なのである。

ただ、異文化を知る上で、日本人にはもう一つの問題がある。日本人の多くは他者とのコミュニケーションを取るのが決して上手ではなく、またその技術的知識にも乏しい。

なぜ日本人はコミュニケーションを取るのが下手なのかについて色々言われている。例えば、日本型文化は寡黙を美とするから、自己主張を好まない

文化に根ざしているから、あるいは日本は白黒をつけない横並び社会なので議論を好まないから、などである。

人間は善か悪かという二項対立は西洋の社会が好むものであり、日本人は人間は善いときもあり悪いときもあるというように、どちらかの意見に組みすることを嫌う。どちらにするかを聞かれて「どっちでもいい」という曖昧な返事は、日本人の得意とするところである。白黒をつけるのではなく、灰色に終わらせるのは日本人がよく取る行動である。

言語と文化は密接であるから、コミュニケーション行動は文化によって限定される面が強い。当然日本文化の中で育った我々に特徴的な言語行動がある。日本人は、言葉でのやり取りや議論を好まない傾向もその1つである。その傾向は、授業やゼミでの討論、また会議の席上などにはっきり現れてくる。

授業中学生に質問しても、たまに「…をもう一度説明して下さい」あるいは「…はどういうことですか」というように1文が返ってくるだけである。返事を返してやると「分かりました」とか「ありがとうございます」と言い、それ以上話が続くことはない。1文で途切れるのが特徴である。参加を促されたから、1回だけは参加するというタイプである。

我々の会議でも議論が白熱してくると、議長や年輩者が「まあまあ」と言って、その席上を丸く収めようとする。議論から論点の結論を導くのではなく、先送りか曖昧な形で決着を計るのは日本型の会議である。結論が出なくなると「議長一任」で議論を回避するのも日本型である。

ゼミで議論を勧めても議論が発展することはほとんどない。たまに手が上がったとしても、単なる質問であり、相手に反論や批評を加えるようなことはない。相手を傷付けてはいけないというように、相手との人間関係を気にする日本型文化があるからである。

アメリカに1年留学した学生が、ゼミで発表者に毎回手を上げて質問する。その他の学生はあまり手を上げることはないので、その学生はとりわけ目立つ。が、周りが議論にほとんど参加しないのが分かってくると、その学生も

手を上げることが少なくなっていく。留学帰りの学生には日本の大学での授業がもの足りないであろうと思う。

言葉でのやり取り、言葉での議論を好まない原因は、日本的文化に根ざした理由もあるが、コミュニケーション技術を学んでいないことも大きな理由ではなかろうか。しかし、上に述べたような日本型文化の中ではコミュニケーション技術はある意味では不要である。日本文化の中にいる限り、コミュニケーション技術はあまり問題にならないからである。

しかしながら、国境なき社会に生きている我々にとっては、日本文化の中で安住しているわけにはいかない。言葉を学びながらコミュニケーションの技術を学ぶ必要がある。我々は「言葉がすべて」型のアメリカ人と話すとその能弁さに圧倒される。そして彼らの自己主張を通ず技術に驚いてしまう。我々はあれほど激しくならなくてもよいから、言葉は技術であるということを理解しなければならない。そうすれば、相手とのコミュニケーションうまく取れるのでないか。

## 2.2 異文化理解は小さなことから

文化というと何か大げさな感じがするが、異文化を理解するには小さなことから始めてよい。1例を出してみよう。

最近、コミュニケーションの手段としてe-mailが急速に発達している。そのe-mailの発展はこれまでにないコミュニケーション表現を生み出して来ている。特に若者は、様々な表現の工夫をしている。その一つにsmileyがある。e-mailの中に多くのsmileyが使われている。

このsmileyを分析すると、横文字文化と縦文字文化の違いが見えてくる。smileyは言葉では表現しにくいことを簡潔に示すために利用されるが、smileyによっても異文化の違いが見て取れるのである。

関口(1999a:102)によれば、米式のスマイリーマークには、眼鏡をかけているとか、髪の毛が長いとか身体的、物理的な状態を表わすものが多く、

日本式のものには、汗をかく、謝るなど精神的な内面の状態を表わすものが多い、ということである。

日本人の子どもがサングラスをかけることはめったにないが、アメリカ人は子どもでもよくサングラスをかけている。この文化的相違が記号に現れて次のような smiley が現れて来る。

8-) user is wearing sunglasses

B:-) user is wearing sunglasses on head — Crystal (2001: 37)

日本は目は口ほどにものを言うという文化である。従って、日本語式は目の動きを記号に反映させる。

(^^) (^^)

(^O^ ) (^O^)/~

(^^) (^^;

(n\_n)v (¥\_¥)

(O.O;) (~\_~;)

(+\_+) (= \_=;)

(?\_?; (¥\_¥;

次は本学科の学生が使用した例である。

\*\* (@\_@) \*\* 目標達成です。やりました!

お忙しい申調べていただいてしまって恐縮です (><).

この結果には納得いきません (>\_<)

今回の範囲は今までより難しいように思います (>\_<) が、がんばります。

遅くにすみません m ( \_ ) m ご返答ありがとうございました。

英語式では目は次のように固定していてほとんど変化がない。

[:-) user is wearing a walkman

:- ( sadness, dissatisfaction

変化があるのは口の表情である。言葉がすべての英語式は口の動きを記号に反映させる。

:o shocked, amazed

:] sarcastic

:E user is a bucktoothed vampire

:F user is a bucktoothed vampire with one tooth missing

:~ user has a cold

— Crystal (2001: 37)

このようにsmiley 1つを取っても文化の違いが現れているのが分かる。英語式が日本で広まったり、日本語式がアメリカで広まったりすることはないだろう。それは根底となっている文化が違うからである。このように身近なものから異文化を感じ取っていくことが重要である。

### 3 国際化とは

異文化理解、多文化共生、そして国際化は本学科設立のコンセプトであるが、ほとんどの学生は国際化＝アメリカ化だと漠然と考えているようである。イコールとは言わないまでもアメリカ偏重は紛れもない事実である。

本学科にはアジアからの留学生がいるが、彼らと日本人が日常のレベルで交流している様子はごく一部の者を除いてはほとんど見かけられない。中国から来ている留学生に日本人の学生をどう思うかと尋ねたら「(勉強をほとんどしないので) もったいないことをしている」と言ったことがあった。

大学に通いながら、授業が終わると急いでアルバイト先に駆けつけ、生活のために遅くまで働いている留学生には、遊興のためにアルバイトに精を出し、大した勉強もしない日本人学生は本当にもったいないことをしていると映るのだろう。

英米圏の留学生には争ってカンパセーショナルパートナーになりたがるというようなことと比較して、アジアからの留学生に近付くことが少ないことを考えると、日本人学生の国際化が何を意味しているか歴然としていると言っても言い過ぎではないだろう。

日本が国際化しているか。しているという人もいれば、していないと言う

人もいる。関口（1999b：70）によれば、国際化とは「国際間の相互作用と交流の増大を意味する」ということである。そして交流の担い手は、社会レベル、組織および集団レベル、個人レベルの3つがあるという。

国が主導する留学生10万人計画や大学で行っている語学研修は、組織または集団レベルであり、インターネットで探してきて1人で出かけるのは個人レベルである。個人レベルで行う国際化は個人が主体的に関わって来るという点で理想的であると思う。国家や集団が号令をかけるのではなく、国際化は草の根運動的な広がりを見せていけば、全体に広がりを見せて行くであろう。

個と個の国際化が進めば、それは集団レベルにもなるし、社会レベルにも発展する。「英語を話すと10億の人と友達になれる」というある英会話学校の広告はなかなか刺激的である。しかし10億の友人が我々には必要であろうか。知り合いはかなり限定されたものなのであるから。

これからは国際化の時代だと言われて久しい。そのように言われると日本人には脅迫観念が生じるようである。国際化は英語を身に付けなければならぬという反応につながるからである。しかし英語を話すということは必ずしも国際化を意味しない。ブッシュ大統領が自国の価値観を押しつけ異質の文明を力でねじ伏せていることを考えれば、とても英語を流暢に操るブッシュ大統領が国際化しているとは思われない。そこにあるのは異文化を理解しない傲慢な政治家がいるということではない。

世界から日本人の行動や考えは時には奇異に思われることがある。ついこの間、イラクで人質になった若者に、自己責任を取れと言った政治家たちや日本人の言動が、世界のメディアの格好の餌食となった。自己責任論は日本人には納得できる心情であっても、欧米人には理解できない言動ということになる。

普段意識もせず当然のごとく行っている我々の行動は、西洋人には不可解なようである。ルース・ベネディクトが『菊と刀』の冒頭で60年も前に書いている。

日本人はアメリカがこれまでに国をあげて戦った敵の中で、最も気心の知れない敵であった。大国を敵とする戦いで、これほどはなはだしく異なつた行動と思想の習慣を考慮の中に置く必要に迫られたことは、今までにないことであつた。(傍点筆者)

この書の中で書かれていることの中には、現在では通じないこともあるけれど、傍点部分はずっと日本人に言われ続けている事実である。どうして日本人は奇異に思われるのであろうか。それを解けばひょっとしたら日本がどうすれば国際化ができるのかのヒントを与えてくれるかも知れない。

異文化の中になかなか入っていけないのも日本人の特徴である。アメリカの大学にある外国人のための英語のクラスのエピソードがある。様々な国から留学生が入ってきて1学期で卒業するのがヨーロッパ系の留学生、2学期で卒業するのがアフリカ・アジア系の留学生、3学期まで残るのがいつも日本人留学生であるという。このエピソードは、外国人の中に入っていける順番に英語が上達するということを述べている。異文化の中に気後れすることなく入っていける社交性を身に付けることも国際化には必要なことなのである。

異質な文化を理解するには小さなことから始める。個人にできることは限られているので、小さなことからでよい。日本は島国なので、歴史的に見ても、異種の人との行き来があまりなかった。戦後の経済成長に伴って、多くの日本人が海外に出かけ始めた。しかし観光目的が大半であり、文化的な交流は少なかった。今日ではそれが必要なことだと考える日本人が次第に多くなって来ている。

我々は多様な民族や文化と交流することがまず必要である。そして小さな積み重ねの一步が国際化を広げていこう。国際化は国家による号令や集団の掛け声でできるものではなく、個人の努力に依存するところが大きいのである。

REFERENCES

Crystal, David. 2001. *Language and the Internet*. Cambridge University Press: Cambridge.

岡部朗一. 1988. 『異文化を読む』. 南雲堂.

ルース・ベネディクト. 1946. 長谷川松治訳『菊と刀』. 現代教養文庫, 2000.

関口一郎編. 1999a. 『コミュニケーションのしくみと作用』. 大修館書店.

———. 1999b. 『現代日本のコミュニケーション環境』. 大修館書店.

